

序 横浜市鶴見区における 協働実践研究の課題と実践

——複合民族化する大都市インナーシティからの発信



渡戸一郎

東京外国語大学特任研究員
明星大学人文学部教授

横浜市の鶴見は歴史的に多文化が重層する複合民族地域としての特徴をもつ。だが私たちのチームが2009年度から鶴見を協働実践研究のフィールドとした背景には、こうした地域の特徴にとどまらず、鶴見区役所における多文化共生政策の積極的姿勢があった。鶴見区は政令指定都市・横浜市のひとつの行政区だが、2008年に「多文化共生のまちづくり宣言」を行い、区独自の「多文化共生推進アクションプラン」(P.117)を策定していた。また、2010年12月に鶴見国際交流ラウンジを開設する計画が進んでいたこともある。協働実践研究の過程はこうした区の政策過程と連携する形で進められた。以下では、まず鶴見の特徴と歴史的な形成過程について述べ、次いで鶴見チームの協働実践研究の過程について簡単に説明しておきたい。

1 横浜市鶴見の複合民族化の進展と今日的な位置づけ

(1) 横浜市鶴見の複合民族化の進展

エスノスケープとして「中華街」が全国的に知られる横浜市にあって、鶴見区の多文化状況が注目されるようになったのは比較的新しい。中華街のある中区に次いで鶴見区は市内第2位の外国人登録者数を示し(2009年末現在、各16,015人、

9,475人)、外国人居住の結節点となっている(外国人比率3.6%)。もともと鶴見には戦前から工場労働者等として流入した沖縄系住民や在日朝鮮人(今日の在日コリアン)が多かったが、1980年代末以降、中国人・フィリピン人等のアジア系や日系ブラジル人・ペルー人等が急増し、潮田中学校の実践報告〔沼尾編、1996〕や広田の『エスニシティと都市』(1997)などによって、その複合民族化状況が広く知られるようになった。

広田は、次のように、鶴見において歴史的に形成された開放的な社会規範の意義を指摘している。「鶴見は…川崎や横浜の『狭間』として、さまざまな要素が混在する地域であった。…沖縄系住民の集住や戦時中の韓国人の強制連行などもその一つであるし、また、独り暮らし老人の居住割合の高い地域としても有名で、いわゆる迷惑施設が押しつけられる地域でもあった。…地域現場で福祉行政や保健行政に携わっている人びとから、『ここは、何でも受け入れ、それに住民からの文句がでない地域』との性格づけがなされていた。だが、『何でも受け入れ、住民からの文句がでない地域』としての性格は、少なくとも外国人居住者のコミュニティ形成にあってはプラス条件として作用している」〔広田1997:40〕。また、「鶴見U地区に日系南米人が急増した原因の一つは『沖縄県人会』の存在にある。…U地区の沖縄出身者たちは、U地区に住む日本人や在日韓国・朝鮮人との付き合いや彼らへの気づかいのなかで生きてきた」〔同上1997:86〕と、集団間関係を肯定的に評価していた。

一方、沼尾は反対に、「地域には在日韓国人、朝鮮人、沖縄出身者、外国人労働者への根強い差別が残っている。在日韓国・朝鮮人や沖縄出身の人たち、南米日系人、アジアからの労働者は、それぞれエスニシティを保持しながら生活しているが、それらを表面に出さない、出せない状況にある。日本人児童生徒や保護者、地域の人たちは『同化したグループ』としての受け入れ体制で臨んでいるのが主である」〔沼尾1996:4〕と、学校現場の実践を通して当時の地域の状況を批判的に捉えている。

その後の鶴見の重層的な都市エスニシティの変化については、福元(2008)、福田(2009)、樋口(2010)などの報告がつづく。次ページの表1は、これらの先行研究等にもとづいて、鶴見におけるエスニシティの変容過程を概観したものである(詳細は「“つるみ”の移民状況を読み解くための歴史年表」P.108-115参照)。

このうち、鶴見における日系南米人コミュニティのトランスナショナルな性格と特異性については、樋口(2010)が以下のように指摘していることが注目される。すなわち、「鶴見の特徴は、そこが『リトル南米』ではなく、『リトル・コロ

ニア・オキナワ』である点である。(ボリビアの)コロニア・オキナワは、1960年代からの転住により、サンパウロやブエノスアイレスに「姉妹コミュニティ」をもつに至った。それが1980年代後半以降は鶴見まで広がり、4カ国にまたがる「地域労働市場」の受け皿となっている。…社会的ネットワークという観点からみたとき、鶴見の南米系移民の特徴はまさに姉妹コミュニティとして移民同士の濃密な人間関係が息づいている点にある」。また、「鶴見は、教科書的な連鎖移民とそれを利用した自営業への進出を可能にした、日本の南米系コミュニティでは特異な地域といえよう。…鶴見は、ほとんどの男性が電設業に従事するのみならず、そこから自営業へと『のしあがる町』としての性格をもつ。」

表1 鶴見におけるエスニシティの重層構造の形成

<p>沖縄出身者</p>	<p>1910年代から東北出身者と同時に流入開始。1927年、鶴見沖縄県人同志会結成。1930年頃、沖縄県人会館開設。企業の「琉球人、朝鮮人お断り」に対する労働争議発生。戦後も沖縄からの流入つづく。県人会は生活改善、本土復帰運動、法人化などに取り組む。1980年、おきつる会館完成。今日では高齢化により親睦中心の活動に変化し、二世・三世は沖縄料理店経営や地域活動の担い手へ。</p>
<p>在日コリアン</p>	<p>1910年代以降、下層労働者として徐々に流入。1935年、潮田に横浜朝鮮人労働者同盟の労働会館開設、民族教育開始。1939年以降、労働力不足を補うための強制連行。戦後も川崎の運動と連携して鶴見の民族教育活動を展開。</p>
<p>日系南米人</p>	<p>1980年代後半から沖縄出身者の親族ネットワークの水路づけにより流入。親族ネットワークの構築を基盤に集住地域を形成。男性は工場勤務よりも電設業で働く。電設業者の大半は、コロニア・オキナワから持ち込んだ社会関係を生かして起業。90年代前半以降、鶴见到南米料理店増加。</p>
<p>中国人</p>	<p>中華街で働く料理人等、工場で働く研修生・労働者、留学生、日本人との結婚移民者、情報技術者・人文国際の高度人材など、階層的多様性が特徴。</p>
<p>フィリピン人</p>	<p>工場や建設業、飲食業で働く労働者とその家族、日本人との結婚移民者。DV、離婚による母子世帯。連れ子の増加。非正規滞在家族の存在。</p>

(2) 大都市インナーシティとしての鶴見の今日的位置づけ

鶴見では、1910年代に始まる京浜工業地帯形成を背景に、伝統的な地域社会構造としての「ハマ=下町」と「ヤマ=山の手」が形成された。このうち「ハマ」は、鶴見川を挟んで川崎市浜川崎と連坦する労働者のまち（大都市インナーシティ）であり、戦前・戦後を通じて沖縄出身者や朝鮮人が流入し集住した。しかし1960～70年代を通じて、大規模工場や町工場は流出し、住商工混在地域として繁栄した「ハマ」は徐々に衰退に向かうことになる。他方、80年代以降「ヤマ」を中心に人口は回復基調に転じ、90年代に入ると鶴見駅周辺にも高層マンションが建設され、東京都心へ通勤するホワイトカラー層が流入し始める。そして同じ頃、こうした地域構造の転換過程の中で、「ハマ」にニューカマー外国人が急増し、複合民族化がさらに進展してきた〔福田、2009〕。

このような鶴見の地域的な変化をよりマクロに見れば、グローバル化する東京大都市圏の一角として、古い工業都市の遺産の上に、脱工業化・グローバル化する現代都市が重層していると捉えることができる。「グローバル都市地域（global city-region）」の概念を提唱したアレン・スコット（2004）は、その内部の社会的空間的構成の特徴として、①歴史上かつてないほど文化的多様性に満ちた都市集中化、②多極あるいは複数の集積地による空間構成の著しい変化、③加速する社会的空間的セグメント化（社会経済的空間的な不平等の拡大）を挙げているが、その背景にはグローバルな移民現象がある。上記のように変貌しつつある大都市インナーシティとしての鶴見は、グローバル都市地域において都心と郊外を社会的空間的に接続する、開放的で文化的階層的異質性の高い地域のひとつに位置づけられよう。

(3) リーマンショック後の経済不況のなかで

ところでアメリカでは、1980年代以降、コリア系、キューバ系などの移民は、自己の民族文化や価値観を選択的に維持することによって、かえって比較的短期間にアメリカ中産階級への経済的統合を遂げてきたが、逆にアフリカ系、メキシコ系、プエルトリコ系などは全体としてアメリカ文化に染まるほど経済的下降傾向にある。このような違いが生じる要因を説明するためにアレハンドロ・ポルテスらは、現代アメリカにおける移民の同化プロセスは分節化されているとする「分節同化理論（segmented assimilation theory）」を構築した〔Portes and Zhou 1993〕。そこでは、①古典的同化理論が示す上昇的適応のパターン、②移民コミュニティの民族的結束を固めながら向上心を維持し、比較的短期間に経済的發展を

遂げるパターン、③半永久的に貧困層から脱出できない、最下層（アンダークラス）への同化のパターンが抽出された（鈴木、2006）。

また、ポルテスらは同論文で、移民の第二世代の急激な増加傾向を踏まえて、第一世代の社会経済的背景とエスニック・コミュニティの資源のありようが第二世代に影響することを指摘している¹が、その背景を理解するための理論的用具として「編入様式（mode of incorporation）」を提示している。言うところの「編入様式」とは、①ホスト国政府の政治（当該移民集団に対して受容的か／無関心あるいは冷淡か／敵対的か）、②ホスト社会の受けとめ方（偏見か／非偏見か）、③エスニック・コミュニティの状態（強固か／脆弱か）の組み合わせからなる。後述のように、鶴見チームの問題意識のひとつは、文化的階層の多様性をもつ移民集団に対する、リーマンショックを契機とする経済不況の広範な影響にある。とりわけ移民第二世代である「外国につながる子どもたち」のライフコースがどのような影響を受けるかが懸念されている。

2 鶴見における協働実践研究

予備調査を踏まえて鶴見会館で2009年10月に開催されたプレフォーラム「鶴見における＜多文化共生のまちづくり＞を考える」では、鶴見区の施策説明とリレートーク「地域社会における外国人コミュニティの現状と課題」²が行われ、①重層的で歴史ある多文化社会という鶴見の特色を踏まえ、②世界経済危機の影響を乗り越えるための「コミュニティ間のつながり」の醸成が課題であることを暫定的な結論とした。その後、筆者は次のような協働実践研究の視点を提示し、“つるみ”の移民状況を読み解くための歴史年表³（P.108-115 参照）を作成するとともに、チームの一員としてフィールド調査に取り組んだ。その過程では、一枚岩の「エスニック・コミュニティ」というよりも、親族ネットワークの存在の重要性、そして移民の「個人化」という傾向が注目された。そして、日本人／外国人という二項対立を越えた、多文化社会における「つながり」の今日的な意義と自治体政策の役割をめぐって検討を進めてきた⁴。

鶴見における協働実践研究の視点（渡戸）

1. 構造変動下における「つるみ」のさまざまな市民活動の実態把握
・とくにリーマンショック後の不況、貧困化、階層化、分断化、排除、（一時）帰国の進行のもとでの＜共生＞の意味の探究をめざす。

- ・ 基底的には、「家族」の変容（多様化、個人化）と「個人」の多様性に視点を置く。
2. 多文化併存ではなく、多文化共生の土壌づくりに向けて
 - ・ 多文化（多様なエスニシティ）の重層性・混交性を地域の豊かな財産としていく。
 - ・ <共生>に向けた地域内外の資源の発掘とネットワーク化をめざす。
 3. 集団間関係の相互認識の深化に向けて
 - ・ オキナワ系、コリアン系、日系、中国系、日本系などの相互認識を深める（関連歴史年表の作成）。
 - ・ それぞれの経験の共有に向けて、インタビュー調査を実施する。
 - ・ その視点として、埋もれた「声」を発掘する／ハイブリッド（混交）性の積極的位置づけ／境界のゆらぎを見落とさない／ホスト社会の価値観の相対化に留意する（ジェンダーの視点の重要性も追加）。
 4. 国際交流ラウンジ創設を契機とする参加の拡大に向けて
 - ・ ラウンジのミッション：市民の複数性・多様性を踏まえた新たな市民社会の創造
 - ・ ラウンジの意義と役割：交流と支援の<拠点>、開かれた<広場>、セミクローズドの<居場所>
 - ・ 市民的専門性の創造：「支援する／される」の関係性を越えたエンパワーメント、参加
多言語・多文化ソーシャルワーカーの位置づけ
 - ・ 具体的な機能：①情報受発信、②通訳・相談、③学習（日本語、外国語・継承語）、④支援（学習など）、⑤場の提供など

以下ではまず「総説」として、多文化社会における「つながり」の重要性と自治体政策の役割が論じられる。そこではとりわけ外国につながる子どもたちへの学習支援の実践を踏まえて、「越境的な社会関係資本」を創り出すことの意義が論じられる。つづく各論では、住民としての地域実践報告（第1章）、インタビュー調査報告（第2章～第4章）、鶴見区の多文化共生政策の展開と課題（第5章）、社会統合政策の観点からみた「つながり」創出の意義（第6章）が提示される。最後に、比較の視点として、鶴見以外の外国人集住地域（東京都新宿・大久保と群馬県）の経験を踏まえた2つのコメントが配置されている。

[注]

- ¹ ボルテスたちはその後も移民第二世代の研究を継続し、Portes,A. and Rumbaut,R.G. (2000) にまとめ、今日の第二世代の同化が「分節された同化」のプロセスを辿っていると指摘している。
- ² このリレートークでは、在日コリアン、沖縄、日系南米人、中国人、日本人の各コミュニティからの視点で報告が行われた。そこでは、東アジアの近現代史のなかで鶴見が移住者を受け入れてきた歴史的経緯とその記憶が語られた。
- ³ 2010年11月末に開催された多言語・多文化社会研究全国フォーラムで、このつるみの年表を、「排除と差別の歴史であり、またそれに対する闘いの歴史であり、さらにその闘いがつぶされてきた歴史であると読み解くことができる」という指摘（政治学者・大川正彦）があった。本年表から何を学ぶかという点については、渡戸・井沢編（2010）を参照されたい。
- ⁴ 2010年11月末に開催された多言語・多文化社会研究全国フォーラムでは、「地域における多文化的な『つながり』の創出と自治体の多文化共生政策——横浜市鶴見区の現状から考える」という表題で中間報告を行った。以下の論考はこの全国フォーラムでの報告を踏まえて執筆されている。

[文献]

- A. J. スコット編、坂本秀和訳『グローバル・シティ・リージョンズ——グローバル都市地域への理論と政策』ダイヤモンド社、2004年。
- 鈴木和子「移民適応の中範囲理論構築に向けて——在日・在米コリアンの比較」奥田道大・松本康監修、広田康生・町村敬志・田嶋淳子・渡戸一郎編『先端都市社会学の地平』ハーベスト社、2006年。
- 沼尾実編『多文化共生をめざす地域づくり——横浜、鶴見、潮田からの報告』明石書店、1996年。
- 樋口直人「都市エスニシティ研究の再構築に向けて——都市社会学者は何を見ないできたのか」『年報社会学論集23号』、関東社会学会、2010年、156-157ページ。
- 広田康生『エスニシティと都市』有信堂、1997年。
- 福田友子「流入労働者たちの系譜——沖縄出身者、在日コリアン、日系ラテンアメリカ人の集住地域としての鶴見」玉野和志・浅川達人編『東京大都市圏の空間形成とコミュニティ』古今書院、2009年。
- 福元雄二郎「我が国に於けるラティーノス集住地域を考える視点——鶴見区潮田地区を事例として」神奈川大学人文学研究所編『在日外国人と日本社会のグローバル化——神奈川県横浜市を中心に』御茶の水書房、2008年。
- 渡戸一郎・井沢泰樹編『多民族化社会・日本——<多文化共生>の社会的リアリティを問い直す』明石書店、2010年。
- Portes,A. and Zhou,M., 1993, “The New Second Generation: Segmented Assimilation and Its Variants”, *Annals of American Academy of Political Science*, Vol.530.
- Portes,A. and Rumbaut,R.G., 2000, *Legacies: The Story of The Immigrant Second Generation*, University of California Press, Russell Sage Foundation.